

# グループディスカッション

## 【進行・総括】

横浜国立大学 名誉教授 西村 隆男

## 【ファシリテーター】

子供のお金教育を考える会 代表  
あんびる えつこ

埼玉県立蓮田松韻高等学校 教諭  
池垣 陽子

東京家政大学院大学現代生活部 教授  
上村 協子

公益財団法人消費者教育支援センター  
専務理事・首席主任研究員  
柿野 成美

佐藤島田法律事務所 弁護士  
島田 広

特定非営利活動法人アスクネット 顧問  
白上 昌子

公益財団法人全国消費生活相談員協会  
消費者教育研究所 副所長  
須黒 真寿美

青山学院大学コミュニティ人間科学部 教授  
永井 健夫

立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科 教授  
萩原 なつ子

## ■グループディスカッション 趣旨説明

西村：文科省消費者教育推進委員会委員長を務めております西村でございます。よろしくお願ひいたします。

今日は会場に、雪の中ご参加いただき、ありがとうございます。今日は会場に、雪の中ご参加いただき、ありがとうございます。また160名にも及ぶオンラインを通じてのご参加の皆様、大変ありがとうございます。

今日の共通テーマは、「成年年齢引き下げに向き合う消費者教育の在り方」ということでございます。

児童監督の映画ですが、何を考えていったらいいんだろうと、大変考えさせる、インパクトがある映画だったと思います。また、事例報告は、それぞれに大変貴重なご報告をいただきました。

たまたま2番目の荏原さんの埼玉県のご報告に関しましては、今週月曜日の朝日新聞に記事として取り上げておりますので、もしお目に留まりましたら見ていただければと思います。

さて、この成年年齢の引き下げは、単に20歳が18歳になったという、それだけのことのように思っているのではないかと思います。これは120年続いた二十歳成人という、これを大きく変えるものであります。

もちろん、申すまでもなく、この流れは憲法改正というところに端を発するわけで、それに必要な国民投票法という手続法が、投票権の年齢を18歳に定めたというところで、青少年の政治参加を促すということであらうかと思いますが、それによって選挙権年齢の引

き下げ、さらにはそれらと統一的にということでしょうか、政府見解は「一貫性を持った」という表現であります。年齢を経済社会においても統一的に取り上げるということ、大人の入り口を18歳を設定して、ここに至るということでもあります。

これからの時間、皆様とともに、今この時代に必要な学び、成年年齢引き下げに伴うこの時代に「大人とは何か」という問いかけも最初に監督からありましたけれども、若者に何が必要なかといったことも含めて、学校に求められる消費者教育、あるいは地域にこれから何が必要な問題として考えなくては行けないのか、家庭でどう取り組むべきなのか、といったことをディスカッションしていきたいと思ひます。

今回、参加者の皆様に事前アンケートを取っておりましたデータを拝見いたしますと、「成年年齢引き下げで若年者の消費者トラブルが増えると思ひますか」という問いに対しては全員が「増えると思ひます」というように答えています。

また「高等学校の消費者教育は、十分行われていると思ひますか」という質問に対しては、「ある程度行われていると思ひます」という方が78%、「ほとんど行われていないと思ひます」という方が21%ということでございます。

また、より積極的に消費者教育を推進していくため、学校や地域で何が必要かということに対しては、「先生方と専門家、市民団体等の連携の強化」というのが一番多くて82%、「先生方の研修ももっと必要ではないか」というのが68%。「消費生活センターとの連携が必要」

というのが45%というようになっています。そうしたことも踏まえて、ぜひ、今日オンラインの参加者の方も、積極的にこのディスカッションの輪に加わっていただいて、意見の交換を進めていただければと思います。

前半は、成年年齢引き下げの問題を中心にお話しただければありがたいと思いますし、また後半では、今後どのように進めていったらいいのか、今後、何か解決に向けてこうした提案ができるのではないかとという課題や展望、問題点の析出などを中心にご議論いただきたいと思います。

そうした意味で、このディスカッションが皆様にとりましても、それぞれのお立場の中でご発言をされると思いますが、より活発に意見交換がなされまして、これからもう1カ月半で成年年齢引き下げがスタートします。4月1日に誕生日の高校生は、4月1日に成人になるということになります、今日の映画ではございませんが。そのようなことも踏まえて、よりアクティブな議論が展開されることを期待したいと思います。

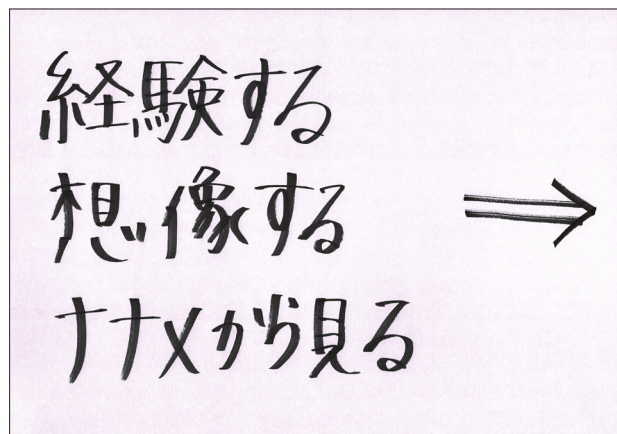
それでは、私からの説明は以上ということで、これからは、実りの多いディスカッションを期待させていただきます。ありがとうございました。

## ■グループディスカッション 発表

池垣：よろしくお願ひします。私たちのグループは、これから教育現場に携わるといふ若者、実際に教育現場で働いている方、さまざまな団体で消費者教育推進の活動をされている方がいらっしゃいました。

最初に、犬童監督の『18歳』の映画の感想について述べながら、ご自身の経験や消費者教育推進に向けて、どんなことができるかを話し合いました。

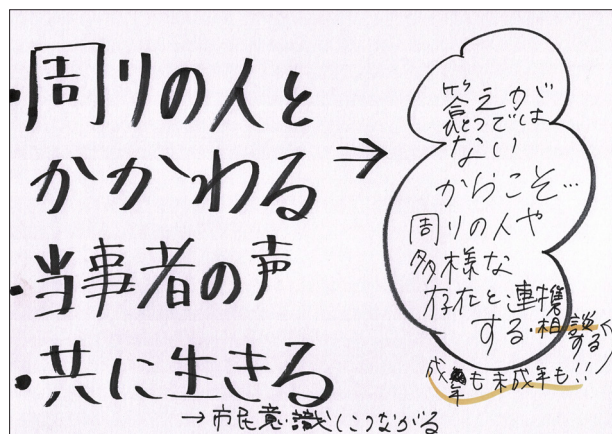
その中で、キーワードに上がってきたのが、「いろいろなことを自分のこととして捉える、経験をする」ということです。



また、消費と生産でかなり分断が進んでいる中で、想像するということ、これをなくしてはいい社会はつ

くれないと考えました。

あとは、「斜めから見る」こと。いろいろな情報をそのまま鵜呑みにするのではなくて、いろいろな角度から考えていくことがとても大切ではないかと話をしました。その中で大事なものは、周りの人とかかわることです。持続可能な社会、皆が安心・安全で暮らしていける社会というのは、模範解答がありません。答えは1つではないからこそ、それを考えていくのは自分一人ではなくて、いろいろな人がかかわっていくことが必要です。



あとは、小さいうちから年齢に応じて、いろいろな経験を積み重ねる。その中で、例えば困ったことがあるときには誰かに相談をする。相談をすることは、全く恥ずかしいことではない。それは若者だけに限らず、トラブルに遭った人もそうです。

私は高校の教員をしていますけれども、学校現場で教えていく中で、いろいろなトラブルが増えるということは、特に高校の現場では想定されています。その中で、私たち教員も、18歳で成人となった生徒たちへの対応をどうしていくのかという課題が山積しています。それを学校の中だけ、教員だけで留めるのではなくて、学校外の方に頼ってもいいんだということ、いろいろな方のお話の中に感じられ、大変心強く思いました。

このわずかな時間で全ての回答が得られるものではないですが、いろいろなお立場の方からお話を聞く中で、困ったということ「困った」と言える関係性を築いていくこと。そして私たち自分自身がそのようなことができる大人になることが必要ということを感じました。以上です。

須黒：須黒です。私たちのグループは、今年3月に大学を卒業される学生の方、行政の方、消費生活相談員の方、映画監督の方というように、いろいろな立場の方がおられました

考えさせるもそう  
リアルな体験 自分事として  
生活に密着している  
余白の時間 (保護者 親子 コミュニケーション) 地域

最初のテーマである『18歳』の映画を見ての感想としては、まず、あの映画は余白の時間がいっぱいありました。あの余白の時間で、いろいろな学び、考えが出てくる。これを例えば親子で一緒に見る、あるいは地域で一緒に見る、その後それぞれの意見を出してコミュニケーションを取りながら話し合うことで、余白の時間についていろいろな考えが出てくるのではないかと、いう意見がありました。

この意見を元は、18歳成人年齢引き下げだけではなく、消費者教育は、子供から親へ、つまり、子どもが学校で受けた教育を子供から親に伝えることがある、という視点から、映画の話に戻り、映画を教材にして一緒に見ることで親子のコミュニケーションの中で、親と子の消費者教育が進むのではないかという話になりました。

それから、映画の中でまさにリアルな体験、これがすごくよかったということです。何よりも親は、例えば消費者教育を知らなくても、子ども以上に当然のことながら、いろいろな体験をしていますので、親子で一緒に会話をすることで、その体験を子どもに伝えることができるのではないかということが出ました。

子供から親に (体験している)  
1つのモノから広がる教育  
連携 (科目、異業種など)

次に、今後の消費者教育について、次のような意見が出ました。先ほども申し上げましたが、子どもから親に、今は、親世代に、なかなか消費者教育を行うことは難しいですが、子どもに対しては学校で消費者教育が行われますので、それを持ち帰ってもらって、親

子で話すということ。

それから、1つのものから広がる教育というのは、お話の中で、今後の消費者教育は教えるではなくて、考える教育が必要だよねと。でも、具体的にどういふものか、なかなか分からない。でも、消費生活は朝から晩まで、ずっと消費生活なので、例えば衣服1つとっても、これがどこで作られたんだろう、いくらだろう、いろいろと広がりがあるよと。そういうことから、「1つのものから広がる教育」というキーワードが出てきました。

それから、「連携」、ずっといろいろなところで言われていることですが、行政と学校教育と地域と家庭、それぞれが連携・協働することで、もっと広がるのではないかと、そういう意見が出ました。以上です。

あんびる：あんびるえつこです。



私たちのグループは、生活ジャーナリスト、高校の講師、消費生活相談員、それから大学生協の職員といった方々で、それぞれのお立場から意見を伺うことができました。

まず、問題の共有から行いました。最初は、この1月に成人になった娘が考えた「消費者教育とどけ体操」というのをやって体をほぐしてから、この話し合いを行いました。


問題としては、まず基本的なリテラシーが欠如しているということが出てきました。相談員の方からは、例えばトラブルの聞き取りにしても、きちんと聞き出すことが若い層は非常に難しいということ。ジャーナリストの方からは、新聞などをあまり読んでいない、裏側にあることを考えることが苦手なのではないかという指摘もありました。

**問題**

- ・基本的なリテラシーの欠如
- ・社会的な整備も不足

**原因**

- ・ネットに依存
- ・ネットの信頼度? グリーンウォッシュ



もう一点、社会的な整備も実は不足していて、きちんと取り締まる法的な整備が行われているのだろうかという疑問も上がってきました。

基本的なリテラシーの欠如の原因としては、子どもたちの今の育ちから、ネットに依存しているということ。それから、特にネットの信頼度、グリーンウォッシュなど、そういったところに対しては、社会的なあるいは法的な整備も不足している。

このような中で、子どもたちが18歳で成人を迎えるということを踏まえて、じゃあ、今後どうしていったらいいのかということを考えました。

これからにむけて...キーワード

**見えないものを見る**

誘い文句の裏側  
商品の裏側 ←大人も含めて

**自分ごと化(エンパシー)**

これからに向けての大きなキーワードはこちらです。まず「見えないものを見る」ということです。ネットなどでパッと、即時的に情報を得ることは、とても簡単になっている中、その背景に何があるのか、背景を捉えるを養う必要があるのではないか、と。これは何も被害にあわないためだけではなく、SDGsにも関わってきます。商品の裏側を見る、誘い文句の裏も見る、「見えないものを見る」という視点で、子どもたちに消費者教育を施す必要があるのではないかとということです。

もう1つは、「自分ごと化」ということです。今回の映画も等身大の本当に特別な子どもたちではない、ごく普通の高校生が出てくることで、問題を自分ごと化することができるのではないかとのお話がありました。

加えて、この見えないものを見る、自分ごと化する、自分のこととして捉えるということは、何も18歳の子どもたちだけに向けたものではないという、重要な指

摘もありました。これらは大人も含めてなのだという事です。

大人も含めて見えないものを見ているのか。子どもたちが置かれている、18歳が置かれている生活、18歳が抱えているトラブルを本当に見ているのか。特に大学の職員の方からは、今コロナで子どもたちが家に引きこもっていて、その子たちが抱えているトラブルも、見えにくくなっている。これからは大人も含めて、見えないものを見るようにする、見えないものを見る必要があるのではないかと・・・と。

自分ごと化についても、大人も含めて18歳成人だけではなく、私たちが「自分ごと」として勉強しないとイケない。ネットの広告の上位に出てくる業者が、必ずしも優良業者でないとしたことなど、私たちが自身も分かっていないのではないかと。大人も含めて見えないものを見て、自分ごと化し、学ぶ必要があるという、重要な気づきをいただきました。

以上がグループ1の発表になります。ありがとうございました。

上村：発表させていただきます。私たちのグループで出たキーワードとっていいか、事例ですけれども、これは参加者の方がご紹介くださった、「駄菓子屋さんからの消費者教育」で、地域で駄菓子屋さんをやりながら、子どもたちに、「あなたはどれをそのお金で買いたいのか?」というのを教える。あなたのニーズはなに? 駄菓子を盗むというのはどういうこと? そういうことから丁寧に教えている、元相談員さんの方がいらっしゃるそうです。

**駄菓子屋さんでの消費者教育**

- (1) 駄菓子を盗むことから契約を学ぶ  
自分のニーズは何なのか 自分ごと
- (2) 映像の力：映画で問う答えは一つではない  
ジェンダーと家庭科 なぜ女子生徒  
「わからない」と思考を拒絶する 女性が多い  
自分事として「大人とは・・・生活者とは」
- (3) 僕の方で解決 貴重な埼玉での当事者の学び  
地域・コミュニティで価値共創 生涯学習

法制審議会参加者から 成年年齢引き下げ  
いいところも取り上げてほしいよね

第5グループ ファシリテーター上村

この参加者の方は、成年年齢引き下げの法制審議会のメンバーでもあり、その会長さんから、今回の成年年齢引き下げのいいところもあり、それをチャンスとして取り上げてほしいというご発言もあったそうです。子ども食堂とか、フードバンク活動など、子どもたち

に新たなタイプの消費者教育をするということ、自分たちで踏み込めるところもあるのではないかというお話がありました。

映画の『18歳』に関しては、大人とは、生活者とは、当事者の視点で、今、考えなければならないところを非常にいい形でご指摘をいただいた映画でありまして、映画っていいなという話がありました。

その中で、女子生徒グループが主役でしたが、ジェンダーの問題をもうちょっと踏み込んでいくことも、あの映画から考えられるのではないか。実は、女性はいろいろな金融リテラシー調査より、「分からない」という回答する傾向があります。つまり、これは分からないといって、思考を拒絶してしまう。なので、金融教育など、こちらから提供しようとしても、金融機関などが提供する知識について拒絶をしてしまうのだろうか。答えは1つではない。高齢者や当事者の意識で考えられる、「映画で問う」という話で言うならば、生徒たちが感情移入できる心の登場人物で、自分だったらと考えられるような、こういうものをもっと行政でも共有をして、金融庁、日銀などにも伝えてほしいという話が出ました。

特に、今日、聞かせていただいた、埼玉県の行政の取り組みは、いろいろなことを自分たちの力で解決できた、自分たちはいい学び合いをしているということを感じられる、そういう取り組みでした。行政の方たち、誰かがこういう形で動き出していただかないと、いい方向に動かしていくことはできないので、そういう取り組みとして非常に評価ができるという発言をいただきました。

地域では、山梨の事例を詳しく聞かせていただいて、とても共有することが多かったグループディスカッションでした。以上です。

**柿野**：よろしくお願ひします。私たちのグループは、先ほど事例報告をいただきました大学教員の竹下先生、大学の先生、それから、高専の先生、そして、柿野というメンバー構成でした。

- ・さりげない日常の中に入り込む危険
- ・疑うことを知らない高校生
- ・18歳を考えるスタート地点を考える教材
- ・説明的になっていない、自分事として考えやすい
- ・高校生に大人になりたくない、と思わせたくない

→問題を起こしたときに、生徒自身がどう解決していくか  
→この先、どのような社会を作っていくか、という視点を持ちたい

最初に、映画についてのディスカッションをしたわけですが、さりげない日常の中に入り込む危険ということを知らせてくれる内容であるとか、疑うことを知らない高校生というような意見も出ました。また、この教材は18歳を考えるスタート地点というところで考えさせられる教材であり、説明的になっていないので、自分ごととして考えやすい。また、監督もおっしゃっていましたが、高校生に「大人になりたくない」と思わせたくないのも、そういった工夫がされていて、非常に優れた教材であるという意見が出ました。私自身も最近、成年年齢引き下げの講演会では必ずこの動画を流させていただいているので、非常に皆さんに考えていただける教材だなと思いました。

この教材について議論をしていく中で出てきた意見としては、問題を起こしたときに生徒自身がどう解決していくかという問題解決能力であるとか、この先どのような社会をつくっていくのかという視点を持たせるような、もう一歩進んだ教育の内容が必要になってくるのではないかということでした。

## 社会で生きる

そこで、私たちのグループでは、「社会で生きる」というキーワードを考えました。この「社会で生きる」ということは、私たち、今、成人している者もそうですし、これから成人していく者も同じですけれども、これを消費者教育として行っていくときに、学校の中で社会の仕組みが分かるような、そんな学校の中を少し変えていくことで、できるような取り組みもあるのではないかと。また、課外活動のような形で外部人材とつながりながら、社会で生きることを感じていくことも必要ではないかという意見が出ていました。

それから、これを実現していくためには、仕組みが必要だという観点で、この仕組みづくりについては、埼玉県の事例が非常に示唆的でした。また、教育の仕組みづくりをダイナミックに進めていくための教材開発が必要ではないかという意見が出ていました。その中で、生徒自身が教材を開発して、その教材をコンペ形式で学生が参加して、それを社会に出していく形で広めていく方法も考えられるのではないかというような

意見が出ておりました。

どんな社会で、どんな人生を歩んでいきたいのかということを考えていく。そんな消費者教育の在り方がこれから求められているのではないかということで、話をまとめました。以上となります。

島田：私たちのグループとしては、自分ごとと捉える、それから、実感を持って消費者被害の問題を捉えることはどういうことなんだろうかということが1つ話題になりました。

#### グループ④

- **自分事、実感を得られる教育**
- **楽しく日頃からできる取組、アクティブ・ラーニング**
- **被害防止だけでなくお金も含めた前向きに生きるための学びのための地域と学校の連携(副読本、連携の仕組み)**
- **世代を超え、立場を超えた「消費者教育」のイメージ**

現場の教員をしていた方からは、自分の責任というように捉えてしまうと、逆に生徒にとってはちょっと重すぎる。今の生徒は非常に真面目なので、ちょっと深刻になりすぎるところもあるということから始まって、逆に誰かがあなたに相談した場合、「どのようにあなたならば答える？」という形で問いかけをしたほうが捉えやすいのではないかと、実感を持ちやすいのではないかという、そのようなご提案もありました。

また、多くの人が被害に遭っている統計を使うとか、あるいは騙されやすさを示すクイズは消費者庁などでつくっておりますので、そういったものを活用する。さらには埼玉の事例にありますように、身近な広告などで騙されるきっかけになるような素材を自分で探して、それを学びの素材にするということで、自分ごととして捉えられるようになるのではないかという意見がありました。

それから、楽しく日頃からできる取り組みとして、アクティブ・ラーニングを含めて、そういった取り組みが必要。ポジティブに捉えられることが非常に大事だというご意見がありました。

それから、被害防止の問題だけではなくて、学びというのは、本来、子どもたちの人生を前向きに生きていくためのものではないかという問題提起があり、そこをきちんと答えられるための教育が一番大事で、そのためには、それを全部、学校の先生任せにするのではなくて、地域でもっとお金の問題については、いろ

いろな専門家が地域にいると思うので、副読本の作成、連携の体制づくりも含めて、学校を支える地域の仕組みも必要なのではないか。

そして、そういった連携をつくる上でも、世代を超え、立場を超えた消費者教育のイメージをしっかりと共有していくことが大事ではないかというお話がありました。ありがとうございました。

白上：私どものグループのメンバーは行政の方、実際に教育の出前授業などを行っている方、消費者教育を研究された大学の先生、中高の教員をされている方、労働組合の方でした。みなさん消費者教育に関心があるということで非常にいろいろなお立場の方々がそれぞれのご経験、立場からご発言をいただきました。

実際、出てきた課題として、特に学校現場ですと、なかなかコロナの状況もあるので、消費者教育をやりづらい、やれないということであったり、行政の方からは、コロナ禍の中で学校側としても、なかなか全体で集まることが難しかったり、オンラインでやるにしても直接顔が見えなくてやりづらいなど、そういった課題が出ました。

- 誰でも消費者である
- よく考える  
(思考力・判断力・表現力)
- つながって広がる  
→ 関係機関・団体と学校現場、  
教員間、教科、学校行事等
- 小さなところから

また、消費者教育の扱いが現状、非常に限られているけれども実は誰でもが消費者であって、そもそもの根源的な、よく考えるということ、それが消費者教育の一番根本にあるのではないかというご発言がありました。

特に、学校現場では、思考力・判断力・表現力が大切にされていますけれども、そこが一番、消費者教育の根底にあるのではないかという発言があり、そこからいろいろなところにつながっていくことが大事であるといった話になりました。つながるという意味も、連携し合うということで、消費者教育を進めづらいところもあるかもしれませんが、企業の人たち自身も一方では消費者であるので、そういった視点でのつながり。学校現場で教員間でもつながっていく。またいろいろな教科にもつながっていく。

学校では消費者教育を行う時間枠を、取るのが難しいということであれば、例えば学校行事の中での文化祭、委員会活動など、よく考えて物事を捉えるという観点でやってみるなど、実はいろいろなところからやれるのではないかとということで、最後のほうでは先生方でも気づきが得られて、まずは小さなところから取り組んでいきたいと思います、というところで話がまとまりました。

以上です。ありがとうございました。

永井：私たちのグループは、行政の生活福祉部にお勤めの方、消費生活相談員の方、そして、大学のIR推進室長をなさっている方、それから、企業のお客相談室にお勤めの方とディスカッションをしました。

1) 学校に、成年年齢に限らず、「消費者教育」の余裕が乏しい

⇨各科目、〇〇教育に消費者教育の要素が

2) コロナもあり、体験をする機会が少なくなった

→やってみよう、考えてみようという機会を増やす

3) 「騙される人が悪い」という風潮・報道ではなく、情報提供者としてリスペクトを

4) 中学生対象の消費者問題作文コンクール

5) 小さいころから、消費者問題があることを

6) 周りや依存・相談しあえる大人文化を

いろいろな意見が出まして、まとめて、かいつまんでお話しすると、このような感じです。成年年齢の問題に限らず、今、白上さんのところでもあった議論と似ていると思いますけれども、学校でなかなか消費者教育に特に取り組む時間が乏しい、そういう問題がある。ただ、そうはいつでも家庭科、公民科あるいはほかの主権者教育、人権教育など、そういったところに消費者教育につながる要素があるので、その辺を意識的に取り上げていくことが大事ではないかという話がありました。

それから、コロナの問題もあり、この2年ほど、学校現場で生徒に体験させる機会がなかなか少ない。今日の映画の監督のお言葉にもありました、当事者意識につなげていくには実体験を踏まえた学びが大事ですから、体験をする機会がなかなか少なくなっているけれども、なんとかやってみよう、考えてみようという機会を意識的につくっていくことが必要ではないかという話がありました。

それから、消費者被害に遭ったときに、騙された人にクローズアップをするような報道の仕方が日本では多すぎるのではないかと。こういう騙される人が悪いというような風潮をむしろ是正して、騙された人たちに、

傷口に塩を塗るような対応を社会がするのではなくて、情報提供者としてリスペクトをする。被害がそれ以上広がっていかないための情報提供者という、そういった捉え方も大事ではないかという指摘が出てきました。

それから、4番の中学生対象の消費者問題作文コンクール、これは企業にお勤めのHさんからの事例の報告で、消費者関連専門家会議（ACAP）という公益社団法人が中学生を対象に消費者問題をテーマとする作文コンクールをずっと続けていたそうです。そこで出てくる中学生たちの作文が、とにかく本人たちもいろいろな学びがあるし、そこでいろいろな提案があって、かなり良い効果が生まれていたそうです。ただ、これは現在は行われていないそうですので、消費者問題に特化したような作文コンクールを、特に中学生対象でやっていくようなことも、文科省も含めて考えていただければいいのではないかと提案もありました。

今の話にもつながりますがけれども、18歳近くになって、慌てて成年年齢の問題を考えるよりも、もっと小さい頃から、成年年齢引下げということに限らず、消費社会、消費生活に関するいろいろな問題があるということ子どもたちに理解させるような、そういった教育環境・文化も必要ではないか。

それから、これは大人側の問題でもあるわけですがけれども、かといって、大人が必ず自分で自分のことを全て決められる人間かということ、そうではありません。そこを変につけこまれて、「自分で判断しないとだめだ」というように騙す側から言われるわけですがけれども、そういった大人観ではなくて、我々は周りとうまく依存、相談し合えるようなところに、大人らしさがあるということ。そこを再評価するといえますか、そういった角度からの大人観も大事ではないかという議論がありました。以上です。

萩原：和たちのグループのまとめを申し上げたいと思います。参加者は、行政の方、高校の先生、小学校の先生、弁護士さん、実際にいろいろな相談業務をされている方、このような方々とお話ことができました。

最初の映画は、グッときましたということで、字の媒体よりもリアルに感じるきっかけがあるので、動画教材は非常に重要だと。今日の基調講演からも得られたものは、当事者性、自分ごととして考えるということの重要性、これは1つのキーワードです。

## グループ 7 まとめキーワード

### ★当事者性 主体性 自分事

若者は教育の対象だけではなく、担い手である。

### ★連携 双方向性 の学びあい

相手を知ることから新しいものが生まれる

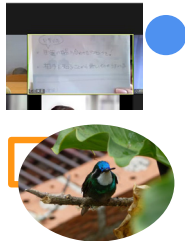
### ★いちいち生徒の成長に合わせたアプローチを！

→生活に活かす力 急に大人になるわけではない

### ★イマジネーションとクリエイション

### ★解釈の多様性 答えはひとつではない

いろいろな考え方があることを指導者も意識することが必要 評価 わかったこと、考えたこと



2020/9/3

プレゼンテーションの資料

1

それから、もう1つの埼玉県、それからSDGsの教材についてのお話で、若者は教育の対象だけではなく、担い手であるということです。そのための場の提供ということが非常に重要になってくるだろうというお話もありました。

それから、消費者教育の中では連携、双方向性の学び合いということが常に言われるわけですが、そのためには、相手を知ることが大事でしょう。つまり、学校には学校の得意分野、あるいは相談なら相談の得意分野、行政なら行政のできることを、そういったものをまず相手は何ができるのかということを知ることから新しいものが生まれ、見出されてくるのではないか。それぞれの消費者教育についての考え、あるいはできることを持ち寄りながら、消費者教育をしていくことが大事だということがありました。

それから、「いちいち生徒の成長に合わせたアプローチを」という素晴らしいキーワードが出てまいりました。これはどういうことかといいますと、今の永井先生のお話にもありましたけれども、急に大人になるわけではない。高校の先生からは、17歳、18歳という境界、あなたは今日から大人ですよと言われても困ってしまう。小学校の先生もいらっしゃったのですが、小中高、そして、大学とあるわけですが、その時々々の成長に合わせた、そういった消費者教育のアプローチが必要になってくるだろうと。

それはどういう教育なのかというと、もちろん、知識としてもそうですが、「生活に活かす力」これも1つのキーワードです。そういったものにしていくための教育が必要だろうと。

それから、もう1つ「イマジネーションとクリエイション」、これは映画の中でも監督さんもおっしゃっていましたが、余白、裏、いろいろなものを考える場ということ。それは想像力と、もう1つのプレーションの想像力につながるだろうということです。

今日、映画を見たのが二度目の方がいて、最初に見たときと二度目に見たときでは、全然違うという、新しい発見があると。だとすると、そのとき、そのとき

で、何度もこの映画を見ることによって、ディスカッションをすることによって、それぞれが当事者性を持つていくことにもつながるだろうと。

それから、もう1つ、解釈の多様性、答えは1つではないということです。これもいろいろな考え方があることを指導者も意識することが必要。これは教える側も回答はこれですではなくて、これを見たときにどのような考え方が生まれるのか、どういう人がこういったことに巻き込まれたとき、加害者になったときに、被害者がどうなっていくのか、そういう想像力も含めてですが、こうですというものではないということ。

そのために、今回、出てきたのが評価をどうするか。消費者教育というものをどのように評価をするのかということが、教育現場ではすごく求められるので、これをどうするか。これはアウトプット (output)、アウトカム (outcome) の考え方にすれば、知識として分かったこと、それがいつか、記憶に残ることによって、いつかこれが活かされるときがあるだろう。そのときに初めて、アウトカムが出てくるのではないかということもありました。

以上です。ありがとうございました。

## ■グループディスカッション 全体総評

西村：皆さん、長時間ご苦労さまでした。最後の総括とさせていただきますと思います。

今、各グループからご発表がありましたように、共通項は何かと思って拾っておりました。また、各グループのオンラインの方も含めて、全体を少しずつですが、拝見させていただきました。その中で、何度か出てきた言葉が幾つかあったと思います。

例えば「自分ごと化」「当事者性」「当事者意識」、つまり、他人ごとではない、自分ごとだということはどう認識させるかという話だと思います。それは関係ないよ、違うよということではなくて、まさに自分自身の問題だということです。

これと関連しますけれども、「考える力」「思考力」とか、そういう話も何度か出てきました。また、「疑う」とか、あるいは「裏側を見る力」とか、同様ですが、「斜めに見る」という言葉も出てきたと思います。

また、「主体性」、これもまた難しいものではありますけれども、いかに我々も含めまして、流されているかということです。あらゆる広告も含め、メディアでの報道も含め、自分で本当に考えているのかどうかということが疑わしい。デジタル化の中で、ますます我々のプライバシーは流出し、さまざまなものを買われ、



さまざまな考え方に翻弄されていくということは事実であります。

そういう意味では、「これからどんな社会をつくっていくか」、これもキーワードとして幾つか出てきました。「想像力」です。これから生きる若者たちが、どんな社会をつくっていかようとしているのか。それを教員も含め大人たちが、どう引き出していかうところも、また重要な課題だと思います。

私はこの映画を拝見して、社会の不正義というものに、悪は悪としてこれを許さない正す力、これを育てなければいけないのではないかと思います。それは、悪質商法に限らず、社会を斜めに見て、問題を熟視して疑ってみる。消費者教育とは批判的思考力、クリティカルシンキングというようにいいますが、1つだけの見方ではない。

先ほどグループ発表で、最後のほうにお話もございましたけれども、解は1つではありません。みんなで、考えて、考えて、考えて最善の解を求めていく。これが必要なことだと思います。気候危機1つとってみても、これ一発で気候変動の問題が解決するという方法は、おそらくありません。そのためには、我々が思考力を働かせ、また疑問に思う力を大事にしながら考えていく。考えなくなったら人間は終わりです。

先ほど、埼玉県のご報告の中で、荏原さんの言葉に印象的なことがありました。「社会を動かす力」、高校生にはこの社会を動かす力があるという、誠に力強いお言葉でした。つまり、この悪を生み出さない、不正義を許さない、そういう気持ちを子どもたち、若者に育てていく。社会を変える原動力に若い人たちを育てていかなければならない。それは、紛れもなく我々、大人の責任だと思います。責任ある大人を含めて、責任ある消費者を育てていくことが大事だと思います。

そのためには、なぜなんだろうというように疑ってみる。成年年齢を18歳にした、これはなんでなんだろう、考えてみる必要があるでしょう。生徒と一緒に考えてみる、答えはないかもしれないけれども。

先ほど、法制審議会の話も出ましたけれども、法制審議会ではどんな議論がされていたか、100%議事録があります。指導者として時間があれば、先生方にはどんな議論が行われたのか、政府が何を考えてそれを審議会に諮問したのか。全てこれも明るみに出ます。国会でどんな審議があったか。全てあります。そうしたことを通じて、考える力を育成していただきたい、そのように思います。

今日のディスカッションを通じて、参加者の皆様が、それぞれの立場、それぞれの場所で行動できる消費者、

消費者市民を育てていただきたいし、その輪を広げていただきたいと思っています。

最後になりますけれども、高校の先生方へお願いでございますが、もしできれば、クラスで誕生日を迎えた生徒に「君は今日18歳だよ」と、みんなの前で拍手で迎え入れて、誕生日を祝い、「18歳おめでとう」と言って、本人から「大人ってなんだろう」、あるいは「こんな社会になってほしい」ということを一言、ホームルームなどで発言させてみてはどうでしょうか。18歳成人第1号です、今年の高校3年生は。そんな意味で、ぜひ先生方には考えていただきたいと思います。皆さん方の今日の議論がこれからの皆さん方の活動の場に生かされたら幸いです。

本日のディスカッションは短時間ではございましたけど、実りの多いものになったかと思います。ご協力ありがとうございました。

以上で、総括とさせていただきます。ありがとうございました。